

常陸大宮市 文書館 だより

600巻もあるお経「大般若経」

故人を弔い、社会の平穏を祈るために読まれるお経。「般若心経」のように300文字ほどの短いお経もありますが、市内の寺や大字（区）では、600巻もある長大なお経「大般若経」を持ち伝えている事例が5件確認されています。このうち当館では3件をお預かりし、調査を進めています。

◇その名も「大般若経」

大般若経（大般若波羅蜜多経）は1世紀頃のインドで作られた般若經典の諸本を集大成したもので、唐の玄奘三蔵が漢訳し、日本には奈良時代に入ってきました。その膨大さから、もたらされた当初は文献学的に研究されることはなく、もっぱら大般若会と呼ばれる儀式での転読（折本状の經典の表紙と裏表紙をそれぞれの手で持ち、左右に傾けながらぱらぱらと繰ること）に使用されました（『国史大辞典』）。また、これを書写して奉納することが功德を積むこととされ、のちには購入して奉納されるようになり、各地に大般若経が残ることになりました。

大般若会では、本尊として釈迦十六善神像が掲げられたため、大般若経600巻には、多くの場合この掛軸が伴います。

大般若経は、早くは奈良時代の「天平写経」（奈良時代に国家事業として行われた写経）と呼ばれるものが残っていますが、庶民に普及するのは中世以後で、江戸時代前期の僧鉄眼道光が開板した「鉄眼版」が天和元年（1681）に完成すると、急速に普及しました。

◇市内に残る大般若経

市内ではこれまでに、小倉区、下小瀬区、小田野区の三浦神社、下岩瀬区（個人蔵）、富岡区の5件で大般若経と十六善神図が確認されています（小倉区は十六善神図ではなく仏涅槃図）。

かつては大般若経の入った櫃を担いで大声で経の文句を唱えながら家々を回るオデエハンニヤ、村祈禱などと呼ばれる民俗行事が行われていました。現在では消えてしまったそれらの行事は、大般若経が災厄をはらって「空」の状態にする力を持つとする信仰によるものです。600巻の大般若経は、その難解な経文とは離れて、圧倒的な量感と大音声での呪文のような読経によって人々の平穏な生活を守る力を持つものとして、信仰されてきたのでしょう。

下小瀬区の大般若経の巻末には、お金を出してその巻を寄進した人物や講中の名が墨で書かれているものが多数見られます。その中に「京都 御経問屋」と書かれた一巻があり、この経がおそらく京で購入されたことと、その売人である経問屋が一巻を寄進している

ことがわかります。江戸時代の常陸大宮の各地で、人々は遠方から大般若経を求め、大切に守り伝えてきました。



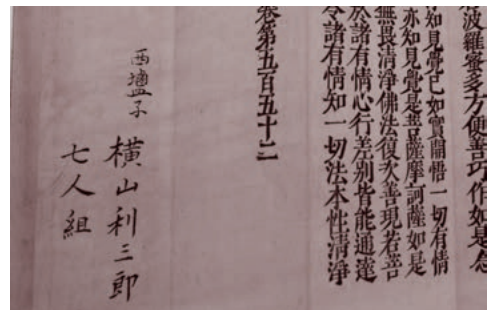
▲大般若経（下小瀬区）



▲三浦神社の大般若経（小田野区）



▲大般若経が保管されてきた郷蔵（小倉区）



▲大般若経巻末の寄進者名（下小瀬区）

【参考文献】石井聖子「大宮町下岩瀬の大般若経から」（『耕人』6号、H12）、那珂市歴史民俗資料館編『大般若経信仰の世界』（H25）、愛知県立大学中世史研究会ほか「石巻神社蔵「大般若経」調査報告」（豊橋市美術館、H28）

■問い合わせ ■ 文書館 ☎ 52-0571